

よろずは

平成二五年
十月号

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地域にかかわる内容をご紹介します。

記紀万葉の故地 5

『万葉集』をひもとくと、五番歌で早々に畿内を飛び出します。舒明天皇の讚岐国安益郡（香川県坂出市ほか）への行幸時に、山を見て作った（軍王の作）と伝わる歌です。

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず 村肝
の心を痛み（中略） 大夫と 思へるわれも 草枕 旅にし
あれば 思ひ遣る たづきを知らに（後略）

（訳文）霞こめる春の永日が、いつとなく暮れていくように
何ということもなく心が傷むので、（中略）りっぱな男
子と想っているわたしも、草を枕とする旅ゆえに憂い
を晴らす術もなく、（後略）

（巻第一の五番歌）
遠い旅路の中で、家に待つ妻への思いを、表現を変えながら延々とつづけています。作者の軍王については記録がなく、すでにこの時には謎の人物として記されていました。その軍王が見た山々は、おそらく南海道の前身から見た景観を言うのでしょうか、故地の候補地が広すぎて特定できません。逆にそういう要素が想像をかきたてます。『万葉古代学係』

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。



宇多津町の網の浦万葉公園にある万葉歌碑